

中国のほんの話(41)

中国語の学習法 ～語学に王道なし、急がば回れ～

蔭山 達弥



NHKテレビ「中国語会話」でおなじみの相原茂先生は「中国語、発音良ければ半ばよし」（中国語は発音をマスターすれば、半分以上できたも同然だ）とよく言っておられる。これは本当の話で、私自身、20歳の夏、短期留学で上海に行ったときに、正確な発音の重要性をイヤというほど思い知らされたものだ。よく現地（中国）に行けば、中国語を話せるようになっていている人が多いが、それはウソだ。中国残留日本人孤児の配偶者（中国人）で日本に来て10年以上になる人の多くが、日本語をほとんど話せないのと同じで、そのような幻想は本日限りさっさと捨てた方がよい。

前々回で取り上げた『北京大学でなもんや留学記』（文藝春秋、2007）の中で、著者の谷崎光さんは、北京語言大学の先生が言っていた「長年教えて私はやっとわかりました。語学はちょっとバカな子のほうができるようになる。それはバカではなく、実は大聡明な（とても賢い）のです。」という発言は印象深いと言っている。谷崎さん曰く大切なのは「すぐ、なぜと聞いたりせず、ムダを恐れず、単純な反復トレーニングと暗記を、疑問を持たず繰り返せる一種の愚直な聡明さ」である。やさしい本（中国語）や中国語の発音の訓練表を先生と一緒に大声で読み、先生に直されて、発音矯正をただひたすら繰り返すことである。授業中に先生の後について声を出して読む重要性を、中国語を学ぶ皆さんは再認識して欲しい。（上級生でも授業中ほとんど声を出さない人がいるが、そんな人は一生かかって中国語は話せないことを肝に銘じるべし。）

相原先生も中国語の音読のすすめを言っておられる。中国語を音読すると、中国語の底に流れるリズム感や拍感覚を体で覚えられ、「音節数調和」と呼ぶべきほんやりとしたルールが身につくのである。青山学院大学の遠藤光暁先生も『中国語のエッセンス』（白帝社、2006）のなかで、「音読を続けていると、意味がフッと消えて、ただ音を出している、という状態になることがあります。これは悪いことではなく、むしろこのような状態を経るからこそ、無意識の領域にも外国語が刷り込まれ、意識しなくてもパッと言葉が出てくるようになるのだ、と言えます。」と、音読の重要性について、述べておられる。

もちろん音読だけでなく、単語もどんどんインプットしないとイケない。『相原先生の課外講義 你好（ニイハオ）中国語』（講談社、2003）はあっと驚くエピソードをまじえて伝授する、中国語単語力パワーアップの課外授業である。中国語で「娘」といえば、なんと「お母さん」、「老婆」は「奥さん」のことで、同じ漢字を使っているも日本と中国では意味がガラッと変わるので要注意。共立女子大学の上野恵司先生の『知ってるつもり中国語』（アスキー新書、2007）も、中国語と日本語のビミョーな関係を豊富なエピソードを通して学べるエッセイである。

中国語の学習が進むにつれて、学習の重点が文法から語彙に移るが、四字熟語や四字成語、組み合わせ連語（動詞＋名詞）、そして慣用句を覚えることが大切である。『中国語常用口語表現1000』（東方書店、1995）は現代中国語の口語で常用される「挿入語」を収録した書である。「挿入語」とは「冒頭にも文中にも置くことができ、話し手の態度や情感をあらわし、そのほかの成分と文法的な関係を生じないもの」である。これらの多くは本来の意味から別の意味に転じていることもあり、正確な意味を知らないと、中国語の学習にマイナスをもたらす。中国語を母語としない日本人の盲点になっているこれらの語はHSKに頻繁に出題されるので、是非この機会に覚えて欲しい。そしてもう一つ、類義語の微妙な違いを極めて、中国語の達人を目指して欲しい。『中国語類義語のニュアンス』（東方書店、1995、②も出ている）はそのための大変有用な辞典である。

かげやま たつや（教授・中国文学）